

Y22a 歴史的な天文資料を活用した日食（掩蔽）の普及に関する研究

齋藤泉（栃木県子ども総合科学館）、相馬充（国立天文台）

2012年は天文現象の当たり年とも言われ、5月21日の金環日食をはじめ、6月4日の部分月食、6月6日の金星の太陽面通過、8月14日の金星食と珍しい天文現象が続いた。

国立天文台図書室には、江戸幕府天文方の所蔵していた和漢書を中心に、暦本、洋書など3000冊が所蔵されており、1991年12月から一般向けの展示も行っている。明治16年（1883年）に北関東から新潟、東北南部にかけて起こった金環日食については、事前に現象を想像して描かれた錦絵が残されており、「第三十六回展示・天文奇現象錦絵集」及び「第四十五回展示・明治時代の天体観測」においても公開された。錦絵に天文現象が描かれることは珍しいが、金環日食を五穀豊穰、富貴の兆しと喜び楽しげに見上げる明治の人々の様子を色鮮やかに描いており、このような歴史的資料は人々の興味・関心を引くきっかけとなりうるので、この金環日食の錦絵を活用した天文現象の普及啓発を考えた。

本研究では、2012年日本天文学会春季の記者発表及び口頭発表をはじめ、秋季年会の口頭発表、オリジナルプラネタリウム番組の制作、下野新聞（約32万部発行）の記事の執筆、第3回金環日食シンポジウムなどの機会を利用した、金環日食の錦絵等による広報・普及活動について、どのようなメディアに取り上げられ、どのくらいの人々が目にしたのかを中心に、その広報効果について報告する。